

伏子山
一
年
一
月
一
日
村

其
一
月
一
日
村

善村のうらと 長閑む。

中
一
月
一
日
村

混
一
月
一
日
村

破るる
ふ〜と音にのせむてぬ
ふ代

夕花のふにぬきあ〜にふか
一茶

ま〜
古の〜
一茶

〜
〜
一茶

○ 祥雲浮紫閣

○ 壽氣縹朱軒

喜水書 □ □

同

○ 春水胎如天上聖

○ 閑雲堂主人清峯

秋山人在畫中行

溪月書 □ □

同

生逢盛世憂何事

癸酉
元旦

家在青山道自尊

松高
出

茶香入座午烟歇
華

影壓簷春晝
閑
紅杏出

扁額の部(豎額)

天満宮

般若寺

清節

龍集癸酉菊月
寒山生書

□
□

樂琴書

雲川題
□
□

德

日新翁
懷
仁風生書

□
□

壽似山

昭和六年七月

老松生書
□
□

鶴聽碁

歲次癸酉二月
應中橋若嶽
山陰書

水遠山長

癸酉初冬書
於二柳居
晴樓更士

志懷霜雪

昭和癸酉晚秋
白祥生書

忘機每物我

芳水忘清屬
癸酉三月書
山下春月書

晴圃書
腸后心鐵

千圃書
危思安居

同

竹圃書
行獨立特

東圃題
新知故溫

紅蘭書
笑如山春

秋芳書
勤在生人

四〇三

相圃書
風月里萬

千涯書
春陽始有

四〇二

千圃書 胆嘗薪臥

義氣 凌秋 日高 懷旦 海雲
白水居士題 弘道館

千山書 心傳心以

嘉辰令 月彩世 極百榮 千秋樂 未央
癸酉孟春吉 樂天先生書

千秋書 隨婦唱夫

明はては 御製 抄はらに 小公人 己の心 子ぬ 母 子ぬわ のけり は ありき 子圃書

千圃書 子心阿不

子心阿不 子心阿不 子心阿不 子心阿不 子心阿不 子心阿不 子心阿不 子心阿不 子心阿不 子心阿不

力拔山氣蓋世 春圃□□

朝聞道夕死可矣 東圃□□

歡樂極了忘情多 千甫□□

巧言令色鮮矣仁 青山□□

俯仰不愧天地 竹堂□□

百聞不如一見 梅堂□□

國破山河在 甫堂□□

德不孤必為鄰 柳堂□□

同

神莫神於至誠
竹圃□□

色即是空空即是色
春圃□□

知足者不利自累也
東圃□□

積善之家必多餘慶
千圃□□

屏風の部(二枚折一雙)

聞鶯繞覺曉
聞江已知晴
一帶空
斜窗松之生

江碧鳥逾白
春蕊欲然金
看又思河日
是歸春
唐詩□□

返照入閣
蒼屐素雅
吳橋台道
少人行
秋風初未
來

北風吹白雲
萬里波
河沙心緒
遙搖落
秋行不
聞

癸酉五月六日
沈唐詩書□□

宜年衆矣
子國名書

之屯田者何人牡丹之愛
噫嗟之友陶後鮮有聞連

貴者也連衣之君子有也
親而不可藝敬焉予謂菊

花之隱逸者也牡丹花之富
香遠益清亭之淨植之遠

而不放中通外直不蔓不枝
唐來世人甚愛牡丹予獨

愛者陶淵明獨愛菊自李
水陸草木之花可愛者甚

同(六曲半雙)

同(六曲半雙)

賦眉山月半輪秋影入香奩
思君不見心渝矣

天門中新楚江開碧如東
出孤帆一片日邊來

朝辭白帝彩雲間千里江
陵一日還兩岸猿聲不住

舊苑荒台楊柳新菱歌泣
唱不勝春只今惟有西江月

誰家玉笛暗飛聲散入春風
隨處城吹東曲中聞折柳

蘭陵美酒鬱金香玉城盛
東柳柳花但使願無違
客名知何處是他鄉

<p>借心原也 波身平正亦不無心 大身正正正正正正</p>	<p>五正正正 身正正正 正正正正</p>	<p>正正正正 正正正正 正正正正</p>	<p>正正正正 正正正正 正正正正</p>	<p>正正正正 正正正正 正正正正</p>	<p>正正正正 正正正正 正正正正</p>
---	---	---	---	---	---

同(六曲半雙)

雙槩の部

<p>新 正正正正 正正正正</p>	<p>林 正正正正 正正正正</p>	<p>正正正正 正正正正 正正正正</p>	<p>正正正正 正正正正 正正正正</p>	<p>正正正正 正正正正 正正正正</p>
--	--	---	---	---

孝
 鶴
 留
 尊
 和
 外
 燕
 泰
 可
 加

深
 加
 心
 越
 道
 光
 心

同

池

邊

寫字

師前

輩座

右題

銘律

後生

老萊想人難

東
 海
 山
 白
 雨
 躍
 珠
 亂
 入
 船
 卷
 地
 風
 來

忽
 吹
 散
 望
 湖
 樓
 下
 水
 如
 天

蘇軾
 白
 石
 齋

同

篔簹

寒上

石徑

雲生斜白

處有

人家停車

坐愛

楓林

晚霜葉紅

於二

月花

於竹樹下
紫園七甲加輪
鏡海

春城

飛花

如雪

寒食東風滿

柳斜

日暮深宮傳

蠟燭

青烟散入五

侯家

昭示春回心緒

落筆如神

27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100

水 松舟
 亭 涼

菱花清澗
 月荷葉小
 亭風

美 子
 中 子
 美 子
 美 子
 美 子

美 子
 美 子
 美 子
 美 子
 美 子

善もせざ
 悪もつゝ
 死ぬる身も
 地もも笑はず
 閑愁の身
 成るまじき

山
 一なるわ
 成るまじき
 成るまじき
 成るまじき

又母も
 かしお味に
 せん
 烟
 灰左やう
 十五五九〇

あの名
 かしお味に
 かしお味に
 江戸の片柳
 何れもすまじき
 成るまじき

知恵のあつ
 ても席は親父の
 ちやうはく
 惚れがどきどき
 仕度くち出まの
 いらし利き

傾城の
 ふたごで席の
 を根がわり
 律義者
 子がおもひ
 子がおもひ

人者びじき
 僅か遊
 市をば
 餅はは
 是のひをば
 ばは

後悔が
 他人の目
 先に立つ
 何のその
 何のその
 意の漸

天下太平
 女房に
 惚けて居
 人も武士
 るせ何城よ
 婿さるる

仲人よ
 あつたら
 甲子風さび
 吉原が
 あつたら
 田舎

気があはば
 目も口もた
 おとこ
 きりいで
 売らん不幸で
 みうけら

傾城
 かしら
 果報者
 利行よ
 祇園一家の
 世話さるる

之の如く可なりとの一里塚 一休
 如く可なりとの一里塚 一休

大蘭が来りて其の買ひておこ
 如く可なりとの一里塚 一休

首首判
 新たらし

同

草の中へ敷きつゝおこ
 如く可なりとの一里塚 一休

さしつゝおこ
 如く可なりとの一里塚 一休

辻書、おかし、
親父のすそごころ

女房のせくろごころ
おとどきおとどき

先生、おかし、
おとどきおとどき

孫宿、おかし、
おとどきおとどき

下子 好 折 主
飛 主 大 事

孝 親
時 親

飲 出 事 ぬ 折 百 篇

え 日 也 息 づ 主 事

詠晩春雨歌

平春海

けふは夕まよふときあ
やなかりの雨をさら
てまの心むゆふれ
乃屋満

同(二首懐紙)

詠二首和奇

藤原家隆

古語を引

志まきさうてあくる梅の
くもすまもわをばもわぬ
あまはけまわらぬ
多敷付春
のまむじりにゆきたるまら
月こまあまなほこるおま
あまのたのまら

夏井池之蓮歌

よる歌

たか子

池のほとりには
まきいづはるあ
くすのうまはら
風ささるら

同(詩懐紙)

賦五月雨

詩一首

菅原遂長

数日陰雲五月天四捨
点滴久相連此時何
作舟楫行際借道
皆巨川

同
表

落葉

山風のふり吹の日に
音こゝと音こゝたを
再びたなわあり

霜

あけのつよはま
さかづくにたけしと残
あねの色うら
朝もたつ田のちか
あわむむおたあ

裏

あけのつよはま

山真雪
 契沖
 七つおはれ
 けいけい
 よふゆい
 けいけい

花
 聖遊
 ああ
 せいゆう
 せいゆう

若菜
 為家
 けいけい
 けいけい
 けいけい

夜は木な
 まつ
 夕
 そら
 まつ

同 (自詠)

梅のつぼみ
あはれ
舟の
はらわし
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

同 (古歌)

ほのつばき
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ
あはれ

同 (古歌)

敏り朝と夕まは
くものくもや
あか
あか
あか
あか

同 (古歌落款入)

大君はさき
いふあそわれ
あそわらね
いそぐまぬも
あそわらね

あそわらね
あそわらね
あそわらね
あそわらね
あそわらね

あそわらね
あそわらね
あそわらね
あそわらね
あそわらね



白日依山盡
 黃河入海流
 欲窮千里目
 更上一層樓
 千圃書□□



滿江明月滿天秋
 一色江色萬里流
 半夜酒醒人不見
 霜風蕭瑟落蓬沙
 年月 鵬高□□

よむるたきもそ梅のたのむ女は
はるものゝらむのこゝろに

喜真

長生里にまゝは丹の念をこゝろ我常
のそまへつゝこゝろおわこゝろ喜真

夜露梅

よしの露のさゝる梅のこゝろに
はる風のこゝろに喜真

海色
喜月

あつゝの海の色
おのゝのこゝろに喜月の月

儂家

よむるたきもそ梅のたのむ女は
はるものゝらむのこゝろに

清風
隔世産

よむるたきもそ梅のたのむ女は
はるものゝらむのこゝろに

遠山 夕立
 夕立 夕立
 夕立 夕立
 夕立 夕立
 夕立 夕立

夕立 夕立
 夕立 夕立
 夕立 夕立
 夕立 夕立
 夕立 夕立

木枯 夕立
 夕立 夕立
 夕立 夕立
 夕立 夕立
 夕立 夕立

夕立 夕立
 夕立 夕立
 夕立 夕立
 夕立 夕立
 夕立 夕立

夕立 夕立
 夕立 夕立
 夕立 夕立
 夕立 夕立
 夕立 夕立

夕立 夕立
 夕立 夕立
 夕立 夕立
 夕立 夕立
 夕立 夕立

聚

秀

遠水題

飛花以海
砚池頭

幽不道人書

いそりる
あまのわらわら

あまのわらわら
あまのわらわら

小田大

昨日到城
郭均集法海
中遍身結

庭去不是著

蚕人

癸酉八月上院
省我生書

一也好

いそりる
あまのわらわら

あまのわらわら
あまのわらわら

あまのわらわら
あまのわらわら

戊申詔書

朕惟アニ方今人文日ニ就リ月ニ將
 ミ東西相倚リ彼此相濟シ以テ其ノ
 福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益國交ヲ修
 メ友義ヲ悖シ列國ト與ニ永ク其ノ
 慶ニ頼ランコトヲ期ス顧ミルニ日
 進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニ
 セントスル固ヨリ内國運ノ發展ニ
 須ツ戦後日尚淺ク庶政益更張ヲ要
 ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服
 シ勤儉産ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚
 俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相
 誠メ自強息マサルヘシ
 抑我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ
 光輝アル國史ノ成跡トハ炳トシテ
 日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淬礪ノ
 誠ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ
 在リ朕ハ方今ノ世局ニ慮シ我カ忠
 良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ維新
 ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威徳ヲ對揚
 セムコトヲ庶幾フ爾臣民其レ克ク
 朕カ旨ヲ體セヨ

御名 御璽

明治四十二年十月十三日

井上千圓敬書□□

かしたの部

持統天皇

其のまゝに
 ありてありての
 ありてありての
 あまの香久山

あまの香久山

あまの香久山
 の
 月も
 ありてありての
 ありてありての

あまの香久山

法性寺入道前関白大臣

あまの香久山

あまの香久山

あまの香久山

あまの香久山

あまの香久山

伊勢大輔
の
奈波井部の
や
は

ふ
ま
の
ほ
あ
の

ふの
あ
菅家
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ

般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照五見
 蓋皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不
 異色色即是空空即是色受想行識亦復如
 是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨
 不增不減是故空中無色無受想行識無眼

五秀 小野 先生 之 碑

五秀小野先生之碑 正三位勲二等伯耆、々、篆額
 鏡浦之涯古祠之傍穹隆殿石脊松而立是為五秀小野先生之墓先生諱成命通稱
 勤之助後改清右衛門成誠君第三子母小池氏文化十三年八月生子駿河田中城
 以其射馭槍劍及銃技皆長桐棲公子賜五秀字為其號初成誠君以射劍二術筮仕
 田中臨歿以先生尚幼養榮山君成顯為嗣迨先生長復為其義嗣中略

其所向則先生傳家之訣尚存于其手矣先生其可无憾銘曰
 叢雲之劍 震耀皇基 燕角之弓 威服荒陸 可生可殺
 防亂極危 維身維國 施從厥宜 赴々武臣 棟々威儀
 噫先生志 不泐在斯 後嗣來裔 請視是碑

恩田城山撰文
 井上千園書丹

大正 年歲在 八月

貞婦 柴垣 萬喜 之 碑

婦人諱萬喜柴垣氏考諱久勝世仕駿河田中侯為參政妣黑田氏年十八嫁藩士青木希
繼未幾希繼罹疾暝越二月生男其道後或勸之以再嫁不應守節歸父母膝下慰老恤孤
暇則嗜國雅遺懷文中略

三十一年二月一日暝齡六十七歲東京染井墓地噫嘻婦人以纖弱之身處艱忍苦不一
而足其道之有今日抑非其賜耶其道微文迺勒其概行碑刊石云
明治四十一年七月 城山恩田利武撰文 千圃井上高題額并書

鹿島萬平翁の碑

鹿島萬平翁の碑 從二位勳一等男爵、
近き頃まては紡車をも一條の綿糸を捨り出すこと女紅の一つやこれ
り外國の紡績糸を其質細うたして價も倍もよき我國の綿布を織るも
の競ひて之をを買ひしありふ中略

さへあれは文を興へる石に利まらぬ殊更普通の文體を用ひたるは
人々皆讀み易しんこと欲せしむるなり
昭和八年九月 文部省委囑 井上千圃篆額并書

表

先祖累代之墓

裏

昭和八年七月建之

○松山家之墓

岡 鶴

台石

揚輝啓君陰

昭和五年
六月

升耀昭萬象

花山香谷書

正一位稻荷大明神

文菴敬書

雪舟筆山水之圖

三幅對

海屋先生書五言絶句

一幅

文淑明七絶

千圃題□

山陽賛文晁墨蘭

復幅

若仲丹頂鶴 五山賛

東照公遺訓

卷菱湖書

昭和癸酉春日

柳堂生題□

癸酉孟夏
千圃題簽□□

同(掛軸及屏風)

椿山蘭亭圖 一幀 竹山書

四八四

探幽齋筆

右尊 梅花
中尊 觀世音
左 松竹

三幅

特聖山樂人物

金裝
六曲

書畫

看板の部

書道教授 洗心書塾

私立櫻木尋常小學校

遠山進三法律事務所

四八五

□ 佐藤内科小児科病院

□ 産婆 大山岩子

古流生花指南

山形畜
草山瑤園

旅館安もの所也

□ 志秋園

□ 市料理 玉泉楼

同

紫雲堂

志願題

回生堂醫院

健堂題

まつとろや

工藤書店

四八八

表札の部

文學博士文野達雄

赤坂青山南町一丁目
一番地

花房長太郎

号紫水

男爵大島巖

四八九

日本橋濱町三丁目

柳青風

友野愛子

梅林寓

毛利家通用門

文部省圖書監修官 大岡安三

印判師

石井三省堂

東京市小石川區折町十二
電話小石川三三一四番

日本教育品株式會社

久野豊治

本社 東京市神田區小川町三〇
電話神田一二五・二二〇五
支社 大阪市西淀川區浦江南一丁目
電話土佐堀三四・二七番

四ノ子
おまかせやう存じたい
えと 大井信子
千代田区千代田

武田二三子

お願ひ申す来月より
大足へは欧米帰途
の途に於ては如何に
詳しめて交すべくに
あつたは及ハせらる
俗と申す取調との
形一層一層骨折
は事々々々々此の

西陣路ハ京都より
とありて如何なる
口カバニハ留るべき
の口持越へる御前
の夕日離雪の舞を
見る事とす

八月十日 内山謹白

又林 勉 友
俊 史

中野の御講の枝
一山お社の舟山
このふたつあんに
等あまた生し
とすまじく
なすも
しそたを新し

自慢の
つまた何事
市計の
角ひ
あとの

五月十日

桂舟 足 休 生

大急ぎにはやから
さうなこの所まで
皆極いうに松井の
おとをり伯母さま
と病後のおとをり
戴の油と油な
くはまのりあ
まわりのさきさき

鴨と例の猫自慢の
次おりの殺物と作
御わりのあまのり
あまのり

二月三日 徳子

伯母様 さま

おはようございます
おとをりねんご

都の長を成りつて
いにはゆるいおね
極いおとをり
そのおとをり
いおとをり
おとをり
おとをり
おとをり
おとをり
おとをり

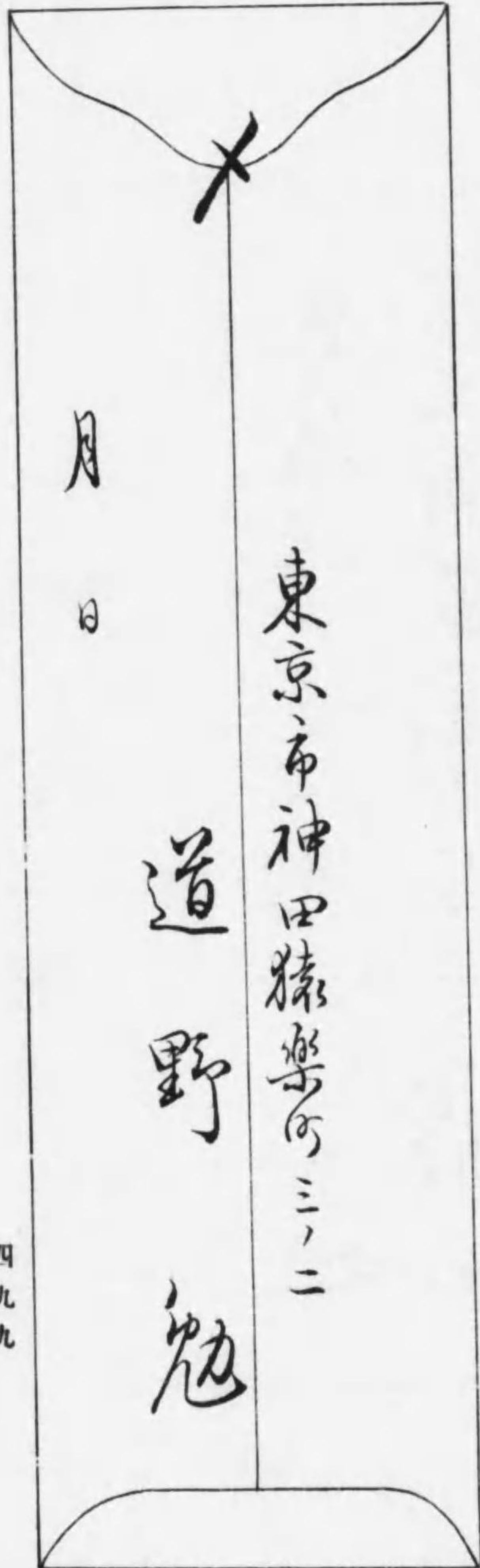
おとをり
おとをり
おとをり
おとをり
おとをり
おとをり
おとをり
おとをり
おとをり
おとをり

おとをり

おとをり

八月 徳子

おとをり

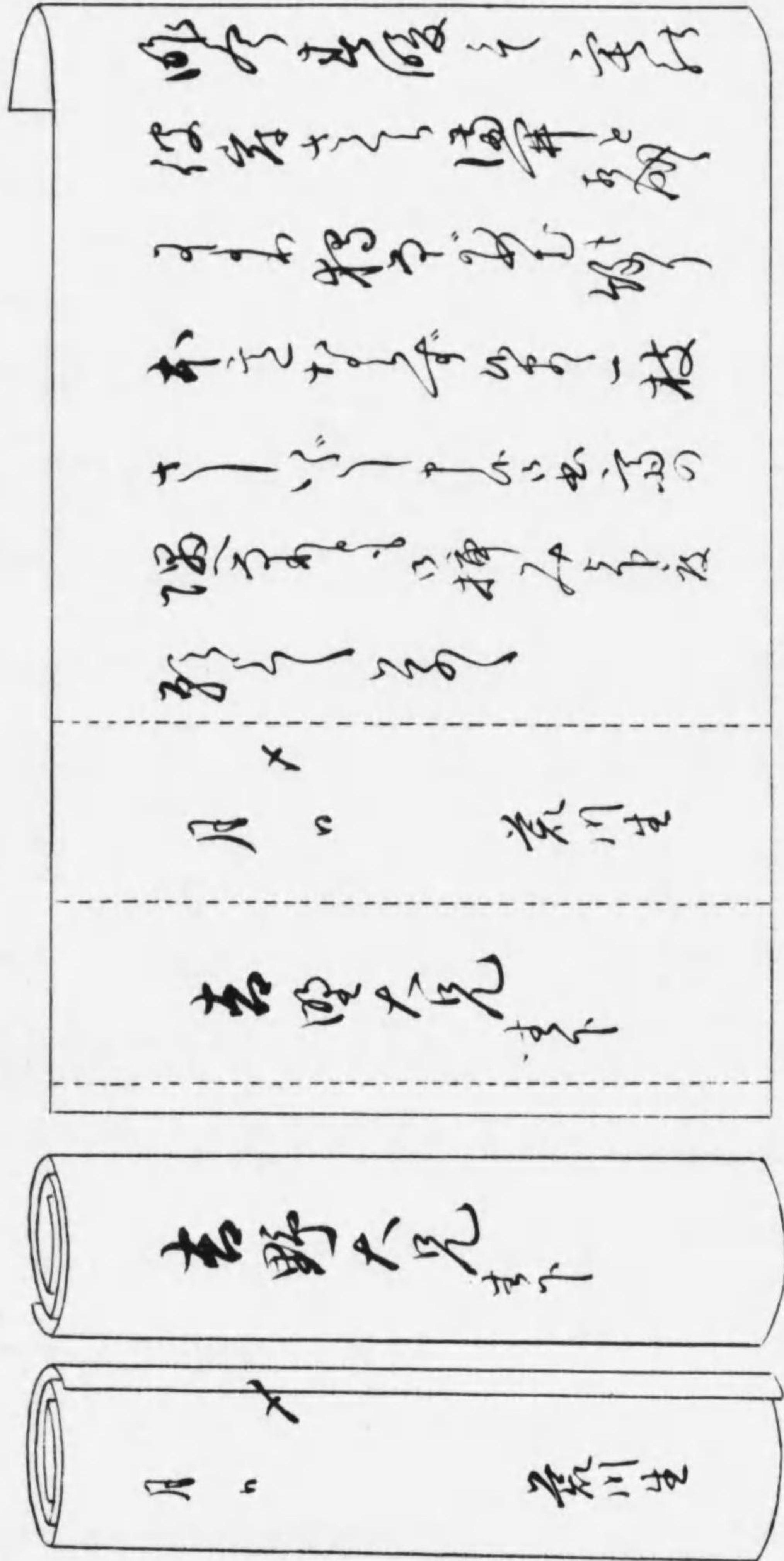


切手

封筒の部

京都市南福寺町三
春木秋山先生
梧 ↓

巻状の部



有板認め方に就ては中越
らよ通分は例の通分の
拙筆よりよしと云ふ
志しと云ふ。一と云ふは
口語をよみく 二月四日

同

坐茶園昨日車接等
よと云ふは例の通分の
の新茶製しと云ふは
百少と云ふは通分より
の風味下と云ふは

清々々々
 新来のよき花
 少々
 夕月
 之也
 心相梅子



目錄

一 袴	壹具
一 末廣	壹對
一 鯛	壹臺
一 昆布	壹臺
一 柳樽	壹荷
以上	

右之通相贈申候段幾久敷

御受納被下度候

昭和年月日 住吉鶴子

高砂松吉殿

目錄

一 末帶	壹
一 廣地	壹
一 家男武士	壹
一 袴留女	壹
一 子生婦	壹
一 友志名預	壹
一 家田納留	壹
右の通之儀申候段	
昭和年月日	
住吉鶴子殿	

受取の部

記

一日目録 金百系

一印状 一通

右の法取手也

月。 山と譲

○

松本茂様

一花瓶 一對

右謝恩會紀念トシテ
贈呈候也

年月日 本朝書道會

文山硯海殿

巻

一小包 一通

一引書出 一通

右書の
一引書出也

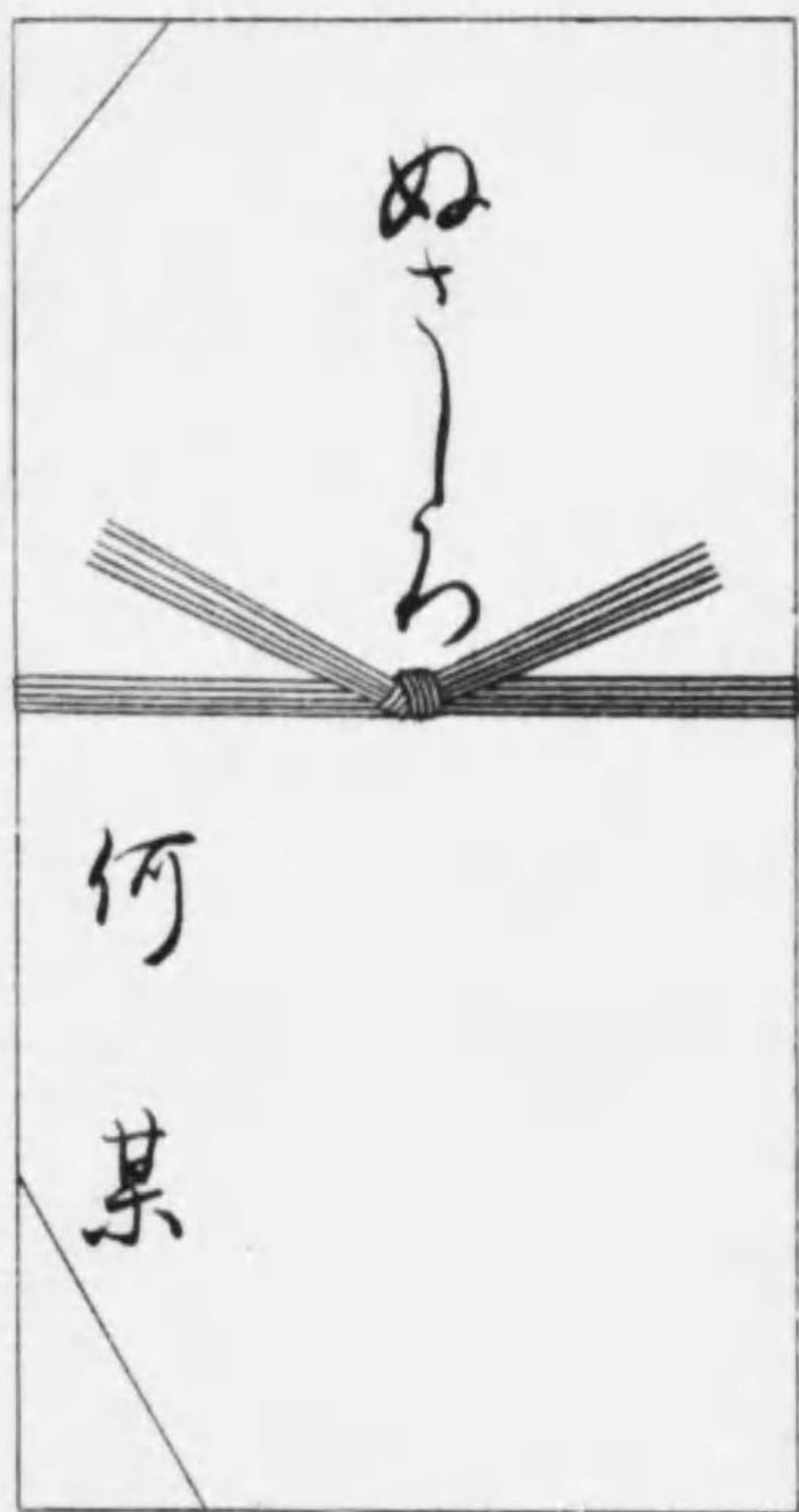
月。 小包

○

大河京豊殿

同

幣帛料
玉串料
香資
印花
以香料
以靈前
少神前
存奠
簿賻



月異名の部

月異名

- 一月睦月、端月 ○二月如月、令月
- 三月弥生、蚕月 ○四月卯月、清和
- 五月皋月、梅天 ○六月水无月、林鐘
- 七月文月、葉月 ○八月葉月、桂月
- 九月長月、葉月 ○十月神無月、小春
- 十一月霜月、暢月 ○十二月茅月、臘月

稱呼

御父上様。御大人様。御母上様。御
多親様。御二方様。御両所様。御兄
上様。御婦上様。御妹上様。御子息
様。御嬢様。御令嬢様。御家内様。
御々様。御合家様。御師匠様。御尊
夫様。御良人様。御主人様。御令閨
様。御令夫人様。御内室様。御刀自様

野の中に一本杉の實も、子規

汽車過ぎるあゝを根岸の歌ぞ長き、子規

浪音れ由比ヶ濱より初電車、虚子

木枯や皆しぼみたポプラの葉、虚子

赤い楮 白い楮と落ちたにきり
碧梧桐

門を出たがさき枝体みれば
碧梧桐

ふもやも宿のアンテナも
井泉水

隣へ郵便たきん交りて
井泉水

山原—高き芝すう人の打つ

ゴルフの球きゅうの初秋乃、音

與謝野 寛

紅糸糸の集りかづけ

サンタマリヤはみかき

與謝野 晶子

落る日れがどやういせうガラス戸は
いま冷やた照らわらうたう

若山牧水

ヒヤシンス薄紫に咲きたまへり
はどめで心顫ひそめし日

北原白秋

あふあふし癖しる人あ浅き水
くつき小路まっ千掬らう

高友茂吉

講室に書よむ子られ勢きけバ
しーしーを生きたかろ

島本赤彦

東海乃小島の碑は白砂に

わが泣きぬれを磐とたもむ

石川啄木

新しき明日の事を信じてとて

自分乃言葉糸に纏はるるがごとく

石川啄木

竹林幽居

北原白秋

ひくかく北の管に

茗荷の香もあつて香よにふふ。

酔をほろりとする日も

わがやまひにぞ青菫。

夢

藍色の花を
摘みし子よ。
その夢は、
散りてゆく。
汝が恋は、
不のかる秋の間に、
汝の眠の間に。

之木露風

夕日

室生犀星

あきしなにて夕日をながめ
わが心は海に
散かきゆく
ちぎし夕日のひびき
わが歌に散りゆく

山ほととぎす

野口雨情

茶の樹畑にや
茶摘み唄

この日永いに
姉さるゝ

菜の花畑にや
子守り唄

夜は明けやすいに
母さるゝ

山ほととぎすが
啼いてゆく

母の唄

西條八十

ねらぬまに

起きるぞ

夜更けの空を眺むれど

涙えたる月のおもてに

白き織雲

ほっかると浮びいづ。

ほっかるとふもい

添寐乃吾思の

目をさるるま。

水邊月夜の歌

佐藤春夫

せつなき、空をすくゆゑに
 月がざらむくまにぞ心む。
 水のあしほを流るゆゑに
 水のいづこぞながれかま。
 身を………
 ……
 ……
 ……
 ……

商業政策

平野講師

第一編 總論

第一章 經濟政策ノ意義

經濟政策ハ國家並ニ公共團體ガ國民經濟政策ヲ維持
 タルヲ施ストコロヲアル手段ヲオブリテアル。故ニ嚴密ナル意味
 ニ於ケル經濟政策ハ實ハ國民經濟政策ト云フベキモノニシテ近代
 國家成立以後後ニ於テ現ハルモノト云ツテヨイ。
 經濟政策ハ主リテ國家ニヨリテ行ハル。然レ國家ハカ
 經濟政策ヲ主體ガアルト云ヒ得テハ。單純ナル意見トシテノ
 經濟政策ハ國家ハナラズ公共團體ハ勿論。政黨。特ニ階
 級。職業團體等ニヨリテ主張セル又地方ニ於テハ。現代ハ如
 國際關係ガ密接ナル時代ニ於テハ國際間ノ協定ニヨリテ
 モ主張セラル。

新茶のかをり

五三二

樹々の若葉の美しいのが殊に嬉しい。一番早く芽を出し始めるのは梅、櫻、杏などであるが、常磐木が芽を出すさまも何となく心を惹く。

古葉が凋落して、新しい葉がすぐ其後から出るといふことは何となく侘しいやうな気がするものである。椿、珊瑚樹、柚子、ハツ手

など皆さうだ。檜、樅は古葉の上に、唯新しい色を着けるばかりだ。

竹は筍の出る頃、其葉の色は際立つて醜い。竹が美しい若葉を着けるのは、子が既に若竹になつてからである。生殖を営んで居る間の衰へといふことを、ある時つくづくと感じたことがあつた。

花曇り、それが濟んで、花を散らす風が吹く。その後、晩春の雨が降る。

五三三

初夏の影

青葉の雑木——栗と、櫟と、刈りこんだ土の上
にぼけが赤く咲き忘れて居ます。

「ほんたうに日が永い。」

私もやはり左様思ひました。太陽がながく
自分と一緒に居てくれるのは、何よりも嬉し
いことだけど、私は其永い日に思ふことの半
分も四分の一も出来やしない。部屋に籠るの

は煙草の煙と歎息ばかり、それからねむくな
ってしまひます。

「カサ、カサ、カサ。」

熊手の音を聞き乍ら、いつかぐっすり眠つ
てしまふ。夢も何も見ない。おだやかか眠り
です。夜は浅いねむりで夢も見られるけれど、晝
寝の床ほど安らかなものはない。

種	受	應	預
貫名先生	田中氏	西野氏	増田氏 大阪(小色)
<p>午後一時 上州に向ふ。改戦開始の前日である。 車室は辛ひにすいてゐた。或は窓に凭り、或は腰 掛に横臥し、或はペンを執り、或は瞑目す。心は 不思議に澄み切つてゐる。火蓋を切つまでの準備 に拵命した前夜までのことが、列車の進行と共に 薄紙を剥ぐやうに消えて行く。そして、新しくい 活動世界が車輪の回轉毎に展けて行くのだ。 私は東京と上州との間が、汽車で三時間あることを この時々々感ずいたことはいふ。 選挙演説の原稿を作り終つた時、汽車は高崎 に着いた。 豫定の行動まで旅宿に投ず、尚改見發表の 準備に多忙を極む。</p>			

備 忘 録

縣廳に赴き、村立農學校設立の件に付き、學務部長に面會懇談を重ね諒解を得。八日の午後一時より更に知事に面會することを約す。並川文學士の東京住所は淀橋區諏訪所四八。勤務先は東京高等師範學校。

昭和八年三月二日

林間に酒を暖めて紅葉を焼く
物言へば唇寒し秋の風

黄梁一炊の夢

榮華ある者は必ず愁悴あり

兩雄並び立たず

一樹の蔭に宿り一河の流を汲む

過ちて則ち改むるに憚ること勿れ

官に廢事なく下に逸民なく

白駒の隙を過ぐるが如し

事實は小説より奇なり

憂患に生じて安樂に死す

久旱甘雨に逢ふ

功名を竹帛に垂る

孝は徳の本なり

百尺竿頭一步を進む

事の成敗は必ず小より生ず

内に省みて疚からず

始有るものは必ず終有り

千羊の皮は一狐の腋に如かず

藍より出でく藍よりも青し

燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや

将を射んとする者はまづ馬を射よ

天網恢々疎にして漏さず

水廣けきば魚遊ぶ

九鼎大呂よりも重し

恒産なき者は恒心なし

九仞の功を一篲に虧く

大功を成す者は小苛ならず

會稽首の恥を雪ぐ

農は國の本なり

哀みは心の死より大なるは莫し

窮鳥懷に入る時は獵師も之を捕らず

徳無くして祿するは殃なり

樂しんで淫せず

不義の富貴は浮雲の如し

父父ならずとも子子ならず

四十にして心を動かさず

父母の恩は山より高く海より深し

文章は經國の大業なり

治に居て亂を忘れず

蛇は寸にして人を呑むの氣あり

殺れて後に已む

陰徳ある者は陽報あり
 虎穴に入らずんば虎兇を得ず
 物あれば必ず則あり
 足るを知る者は富む
 水清ければ魚棲まず
 水は方圓の器に随ひ人は善悪の友に依る
 木に縁して魚を求む

譽あらんす毀無かれ
 百川は海を學びて海に至る
 門前雀羅を張る
 勇は乱を作さず
 兄たり難く弟たり難く
 勝負は兵數の多寡に依らず
 白日閑過する莫れ

秋風起り白雲飛ぶ
 朝に紅顔あつ夕に白骨となす
 禮過ぐれば諛となす
 衣食足りて則ち榮辱を知す
 吞舟の魚は枝流に游ばず
 魚の木にのぼるゝの如し
 涙をふらつて馬糞を斬る

今日學ばずして来日ありと謂ふ勿れ
 運用の妙は一心に存す
 過ぎたるは猶及ばざるがごとし
 聲なくして人を呼ぶ
 牛頭を懸けて馬肉を賣す
 疑心暗鬼を生ず
 大巧は拙なるがごとし

君子は多く人をよぶことを欲せず
男女七歳にして席を同くせず
柔能く剛を制す

越鳥南枝に巢ふ

智者は惑はず勇者は恐れず
窮しては當に益く堅かざる
志ある者は事竟に成る

可愛い子には旅をさせ

悪事千里を走る

難波の蘆は伊勢の演萩

田舎の學問より京の晝寝

犬も歩けど棒に當る

牛に曳かれて善光寺参り

馬には乗つて見よ人よハ添つて見よ

人間萬事塞翁が馬
窮鼠猫を齧む

樂は苦の種 苦は樂の種
生兵法は大疵のもろく

光陰に關守あり

玉琢がざりざり器をなやまず

花は櫻木人は武士

朝起に三文の徳あり

小人閑居して不善をなす

瓢箪から駒が出る

武士は食はねど高揚子

桂馬の高飛び歩の餌食

下手の勘考休むに似たり

十讀は一寫に如かず

案どしむらう生むぐ易い
待つば海路の日和あり
来年の事を言へば鬼が笑ふ
焼石に水をかくる如し
知らぬ佛見ぬが神
無理が通れば道理引込む
名人は筆を擇ばず

人が死して名を残し虎は死して皮を残す
門前の小僧習はぬ經を讀む
柳の下にいつも泥罇は居らぬ
團栗の背くらべ
一富士二鷹三茄子
生みの恩より育ての恩
勝つて兎の緒を締めよ

心の駒に手綱ゆるすふ
 樂あしバ苦あり 苦あしバ樂あり
 一利あしバ一害あり
 理窟と膏藥は何處へでも
 天は自から助くる者を助く
 覆水盆に返らざる
 旅は道づれ世はなやみけ

一文吝みの百文知らず
 思ふ中には垣をせよ
 親しき中に禮儀あり
 論語讀みの論語知らず
 笑ふ門に福來る
 秋の日は釣瓶落し
 悪に強きは善にも強し

蒔かぬ種は生えぬ
 牛は牛づゝ馬は馬づれ
 無い袖は振らぬ
 瓜の種に茄子は生えぬ
 牡丹餅は棚にあり
 榮耀に餅の皮を剥ぐ
 縁ふき衆生は度し難し

遠きを知りて近きを知らず
 棄てし神あれば捨ふ神あり
 我が身扱つて人の痛さを知られ
 十日の菊六日け菖蒲
 焼野の雛子夜の鶴
 人を呪はば穴二つ
 雨降つて地かたまる

稼ぐに追いつく貧乏なり
 ひだるゝ時にまづいものゝ
 五月雨は腹の中まで腐らせ
 氣がきらく間がぬけ
 思ひ立つたが吉日
 負うた子に教へらして浅瀬を渡
 三人よれば文珠の智恵

千一日の勤學より一日の名匠
 百藝は一藝の精に如かず
 下戸の建てたる藏もなり
 つらあはぬハ不縁の基
 愚者の百行より智者の居眠り
 健全な精神は健全な身体に宿る
 間違と氣らがひいゝもある

聞いて極樂見て地獄

無い時の辛抱有る時の儉約

子を持つそ泣ぬ親はない

魚心あれば水心あり

あけく悔き玉手箱

朱に交れば赤くふる

思いて通へば千里が一里

立に上下の隔なき

困った時の神だのみ

飛んで火に入る夏の虫

創業は易く守成は難く

三寸の舌に五尺の身を亡す

入船あれば出船あり

猿も木から落ちたる

月に叢雲花に風

商人は損していつの倉が建つ

強将の下に弱卒あり

正直の頭に神宿る

人を見て法を説け

花染のうつろひ易き人心

人は七轉び八起き

水戸義経辟書十訓

樂は苦の種 苦は樂の種と知るべし

主人と親との無理ある者と思へ下人は足らぬ者と知るべし

子程に親を思へ子無き者は身に較べて近き子と知るべし

控に恐れよ火に怖ぢよ分別なき者におぢよ

恩を受けて忘る事勿れ恩を施して思ふ事勿れ

奢と酒と欲と色とは敵と知るべし

朝寝すべからず 咄しの長坐すべからず

小なる事に分別せよ大なる事に敬懼くべからず

九分は足らず十分は溢るゝと知るべし

分別は堪忍にあり過ぎたるは及ばざるに如かず

昭和癸酉秋日

洗心堂千圃書



昭和八年十月二十五日印刷
昭和八年十月二十五日發行

書道教範奧附
〔定價金四圓五十錢〕

書者 井上千圃

編輯者兼 海老原博

印刷者 谷本正

東京市麴町區飯田町二丁目十二番地
東京市芝區愛宕町二丁目十四番地

不許複製



發行所 敎文社

東京市麴町區飯田町二丁目十二番地

電話九段(33)二七六六番
振替東京三三七二四番

351

430

終

